The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	伝豊臣秀吉所用の陣羽織に関して
Author(s)	吉田, 雅子
Citation	デザイン理論. 2000, 39, p. 112-113
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53028
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

伝豊臣秀吉所用の陣羽織に関して

吉田雅子／京都大学

1　はじめに

名古屋市秀吉清正記念館には，茶の地に刺繍が施された陣羽織が収蔵されている。この作品は，従来南蛮交易により舶載されたものと考えられ，ヨーロッパ製か中国製かはっきりわからなかった。この作品をヨーロッパ製とする向きがあるが，筆者は染織史的見地から，ポルトガルにより中国で発注され，後に日本に舶載された中国製品であると考える。以下その理由を記すとともに，この作品の特徴を考察したい。

2　天鵞絨

この陣羽織は，計８裂の無地茶色の切天鵞絨から構成されており，身頃の4裂には「４枚綾」，上衿と身返し衿の４裂には「変則４枚綾」の地組織の天鵞絨が使用されている。筆者が計34点の中国明代製の天鵞絨を調査した結果，この陣羽織は，1661年前後に中国で製作された万福寺所蔵の天鵞絨や，1620年以前に中国でヨーロッパ人向けに生産され，慶長遣欧使節によって日本に請来された祭服と，地組織が同じで，染色や糸の特徴も近似していることが判明した。そのためこの陣羽織の天鵞絨は，中国で生産されたものと判断することができる。

3　刺　繍

この陣羽織には，白，藍，緑の絹製の撚糸と，中国製の特徴を示す金糸がふんだんに使用されている。刺繍技法には，駒取繍，辮子繍，相良繍の３種が使用されている。辮子繍は鎖繍の一種だが，特に中国的な技法である。８枚の天鵞絨裂に施された刺繍は，材質，技法ともに中国製の特徴を示している。

4　仕立て直し

刺繍，裁断裂，意匠構成などの細部を検討した結果，この作品は少なくとも２回の仕立て直しを経ていることが明らかになった。中国でまずマントが製作され，それがおそらく傷んだ際に，状態のよい部分だけが切り取られて再利用されたこと，現在の上衿と身返し衿の布は，当初別の用途のために製作されたもので，その一部が再度使用されたこと，後身頃は，前身頃や衿の裁断裂をはぎ合わせて一枚の衣料に仕立て直すために，後から製作された可能性が高いことなどが推定される。

この作品の衿の形態や裾の曲線は，マントの特徴を引き継いでいるが，脇線に大きな袖口がつき，肩線が水平である点は，マントから大きく逸脱している。これは，陣羽織の特徴である。16世紀後半から17世紀初頭はポルトガルによる南蛮交易が盛んな時期で，交易でもたらされた外来衣料の影響を受けて，日本でも様々な衣料が作られ始めていた。陣羽織は，日本古来の胴服などの衣料と，舶来品であるマントの双方の影響下に次第に形成された衣料で，特に初期の陣羽織にはマントの影響が色濃く表れている。この作品はまさにマントが陣羽織へと変容していく過程を示すもので，中国で一度仕立て直されたマントが日本に舶載され，当時の流行に乗じて陣羽織に再度仕立て直されたことがうかがわれる。

5 意　匠

この陣羽織の意匠には，ヨーロッパ，中国，インドのベンガル地方の影響が見受けられる。身頃の断片的な花文様を，単位文様に基づいて復元したところ，それは2本の蔓が左右対称にうねる中に花が配された文様であることが判明した。このような文様は，16～17世紀のヨーロッパの布に頻繁に見られるもので，この陣羽織の文様は，それらを原形にしたものと思われる。また衿に配されたモティーフは，ポルトガルの16世紀の写本に見られるドラゴンに類するもので，表現にはヨーロッパのグロテスク様式の影響が見受けられる。ボーダー文様には，イベリア半島製マントのボーダー装飾，中国工芸品の唐花，ベンガル刺繍の人物や生き物などの影響も見受けられる。

この陣羽織には，ベンガル製のヨーロッパ向けベッドカヴァーとの共通点が見受けられる。人物の表現，地間を埋めるようにモティーフを配置する構成方法，主文様を鎖繍で一面に施すこと，ボーダーを小さな点（相良繍）と直線（鎖繍）で表すことなどである。

この陣羽織とベンガルのベッドカヴァーを結びつけるものとして，ポルトガルの存在が考えられる。ポルトガルはインドのゴアと中国のマカオに拠点を置いてアジア交易に参入し，インドではインド・ポルトガル様式，中国では中国・ポルトガル様式の作品群を生み出した。ヨーロッパの銅版画が中国に持ち込まれ工芸品を製作する際の雛形として使用されたことはすでに指摘されているが，この陣羽織に見られるヨーロッパ，ベンガル，中国の意匠と技法の折衷は，ヨーロッパ製品だけでなくベンガルの染織品も雛形として中国に持ち込まれた可能性を示唆しているといえよう。

6 結　び

この陣羽織は，交易概況や衣料形態，意匠，織物，刺繍の特徴から判断して，16世紀後半から17世紀初頭の製作であることは確実で，これは豊臣秀吉（1537－98）の時代と重なっている。二度に及ぶ仕立て直しを経ていることは，これらの裁断裂が当時いかに高く評価されていたかを示しているといえよう。秀吉はこのような貴重な品を入手できる立場におり，また実際に宣教師などから何枚ものマントの贈呈を受けた記録が残されている。現時点では，秀吉が実際にこの作品を着用したという確証はないが，ねねの甥の木下家に代々伝えられてきたことを考えると，この作品が秀吉周辺の品であったことはおそらく間違いないと思われる。

ポルトガルが中国に発注した染織品の事例は大変貴重で，ヨーロッパには数点の衣料と裂片が残るのみである。この作品は中国明代に生産されたマントの事例としてだけでなく，陣羽織の初期の発達段階を示す事例としても，染織史や服飾史上，重要な位置にある。そして意匠や技法に，発注国のポルトガルや生産国の中国に加え，ポルトガルがアジア交易の拠点としたインドの製品の影響が見られることも重要で，この作品には当時のポルトガルによるアジア交易の実態が，如実に反映されている。